

## 報告

# 「地域日本語教室向けのビギナー教材開発」進捗状況(平成 29 年) ～ 教材からコミュニケーションシートへ ～

A Progress Report on the Development of Teaching Materials for Beginners (2017)  
- from Teaching Materials to Communication Sheets -

## 国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会<sup>1</sup>

Foreign Residents Support Group of ILCS

### 0. はじめに

「地域日本語教室向けビギナー教材開発」プロジェクトは、平成 27 年度から 3 年計画で開始された。初年度において日本語による意思疎通が困難な学習者<sup>2</sup>に対応するボランティアのニーズを把握し、平成 28 年度には、そのニーズに基づく入門期学習者向け教材を試作し、試用の協力を申し出てくれたボランティアへの提供を開始した。その間、開発に携わる私たちの考えも深まり、イラストシートを「やさしい日本語」と共に用いれば、日本語教室以外の現場でも活用できるのではないかという、教材開発とは少し方向の違う部分での関心が芽生えてきた。そこで「やさしい日本語でつながるイラストシート開発事業」として(一財)自治体国際化協会に「多文化共生のまちづくり促進事業」の助成を申請し、採択されたところで、平成 29 年度が始まった。29 年度は、試用協力ボランティアからのフィードバックを収集・検討するとともに、アカデミア事業の一つとして実施している外国籍県民対象講座「はじめてのにはほんご」において、わたしたち自身も入門期学習者に対しイラストシートを実際に使ってみて、シートへの修正を施してきた。12 月 14 日にはその時点でのシートの改訂状況や新作シートについての「公開検討会」を実施した。その一方で、シートの汎用性を開発するため、職務上、時に外国人とも接触の機会がある地域の専門職の方々からの聞き取り調査をも並行して進めてきた。以上が 29 年度の 12 月までに「地域日本語教室向けのビギナー教材開発」および「やさしい日本語でつながるイラストシート開発事業」として実施してきたことである。前者が後者の母体であるため、両者は不可分で、共通している部分も多い。

### 1. 試用とそのフィードバック

当初の予定ではフィードバックの聞き取りは 28 年度内に終わられる予定であったが、より多くの人の協力を得たいという思いから、教材提供が終了したのが 1 月になった。試用教材も適宜整理され、最終的には 18 点 25 枚の提供となった。

それに伴い、フィードバックの収集は予定より遅れたが、18 点のすべてについてフィードバックが寄せられ、内容を細かく整理分類して数えると、総数 213 件に及ぶ試用報告やご意見、ご提案等が寄せられた。いずれも大変協力的なフィードバックで、ボランティアの方々には厚く御礼申し上げたい。以下に、そのフィードバックの概要を報告する。

イラストシート全体に寄せられた意見が 33 件あり、その半数近い 15 件はイラストの種類を増やすこと

への要望であった。これはイラストそのものへの評価が土台にあるからこそであるが、すでに 2015 年の紀要にあげた報告<sup>3</sup>で述べたように、イラストへの「終わりが無いニーズ」の反映ともいえる。次に多かったものは、イラストの絵柄やわかりやすさへの評価で、6 件数えられた。ついで「学習者自身が早く追いつきたいのでいつまでも絵にはつきあえない」、「(入門期学習者には)そもそも慣れた人が対応するので不要」「シートによりむらがあり使いにくい」という批判的な声が 3 件あった。

それぞれのシートに寄せられた合計 180 件のご意見、ご提案、ご感想について、個別に言及することは、実際のシートとの対照をなくしては理解困難であること、また煩瑣にもなりかねないため、主だった事項のみ取り上げる。まず、もっとも多くの声が寄せられたシートは、趣味(スポーツ・非スポーツ)を扱ったもので、27 件に上った。数の多さから、このシートがよく使われたと考えることができよう。イラストのみを列挙し、タイトル以外に説明のないシートだが、入門期学習者にも、その先の学習者にも大変使いやすかったという感想や、実際にこうして使ったという例などが試用報告の大半を占めた。使用法がわたしたちの意図とは少しずれていても、ボランティアの判断で自由な使い方をしていただけたことは、むしろ歓迎しており、シート上で表現されている事柄に奥行きや広がりを与えていただいたように感じている。

それに次ぐのはフェイスシートとして用いることを想定した、名前や住まい、家族数、職業等を尋ねるシートで 22 件の声が寄せられた。しかし、これについては半数近くが、一枚に情報を詰め込み過ぎていること、アイコンとして用いているイラストがわかりにくいことを指摘し、ついで、話題の一部が対象者によっては尋ねにくいことなどへの言及が多かった。批判は真摯に受け止めて改善に取り組むが、実は、情報の取捨選択は、当初からボランティアのほうで必要に応じて調整されればよいと考えていた。不要であれば、その欄を無視すればいい、ということである。また、一枚にあれこれ盛り込んだことも、初年度の基礎調査で判明した「簡易でコンパクト」<sup>4</sup>という要望を反映したつもりであった。この意図が伝わらなかったことを踏まえ、今後の配布にあたっては、何らかのガイダンスを添えることも検討する。

仕事のイラストを列挙したシートにも 21 件の声が寄せられた。これもよく用いられたシートと思われるが、イラストの種類不足を訴える声とともに絵柄への要望が目立った。最初にあげた趣味のシートと同様のしつらえなのに、趣味のほうは種類の不足や絵柄への要望はごくわずかであった。この違いは、趣味ならば適当に選ぶことができても、仕事となると正確に伝えたい、よって、イラストも現実の通りに対応させたいと考えるためだろうか。またフェイスシートの場合と同様、失業等への配慮から、使用を躊躇した人もいたようだ。

さて、総計 213 件を記述の内容別に考察すると、大半は具体的な試用の報告、好意的な評価や使用法や改善への提案であった。入門期学習者向け教材としてのイラストシートの試みは概ね成功だったといえるだろう。批判的なものに注目すると、フェイスシートおよび学習者の言語使用の状況を尋ねるシートを中心に「盛りだくさんすぎる」「細かすぎる」という意見が目立った。作成者側が考えるニーズと現場でのニーズの乖離があったためと思われる。また、「使い方がわからなかった」「話し教材なのか、書き教材なのかわからなかった」「(言語能力評価の)基準がわからなくて使えない」などの戸惑いや「色がたくさんあるが覚えきれない」「一つずつ意味を確認した」という、作成者側から見れば、自由な使い方というより誤解というべき声も少なくなかった。しかし、これはもちろんわたしたちがシートの意図を十分伝えきれなかったことに起因するもので、作成者側の反省材料である。

こうしたフィードバックを通じて、わたしたち自身の中で、わたしたちは入門期の学習者に何かを「教える」ためのツールを作成したかったのではなく、教えることよりもコミュニケーションを優先したいのだ、という意識がより明確に自覚されるようになった。初年度の基礎調査において得られた「難しいと思わせない」「簡易でコンパクトな形」「入門期用にそぎ落として」などの教えることへの抑制を示唆する発言<sup>5</sup>を意識してイラストシート作成に取り組んできたのだが、今では、抑制というより、むしろ教えることを捨てて、コミュニケーションによる信頼と安心のうちに、言葉をつなぐことを可能にする、入門期学習者向けの「教えない教材」を目指し、その意図が十分に地域日本語教室での使い手に伝わるよう、フィードバックの一つ一つを反映させてシートを仕上げていきたいと考えている。それはとりもなおさず日本語教室での模擬的な会話の域を出て、「多文化共生のまちづくり促進」に寄与できる日本人外国人双方の人材育成につながるツールの作成であると位置づけることができよう。そしてこれを機に、これまで「イラストシート」と呼んできたものを、既存の教材用イラストと区別するため、今後は「コミュニケーションシート」と呼ぶことにしたい。

## 2. 修正の例

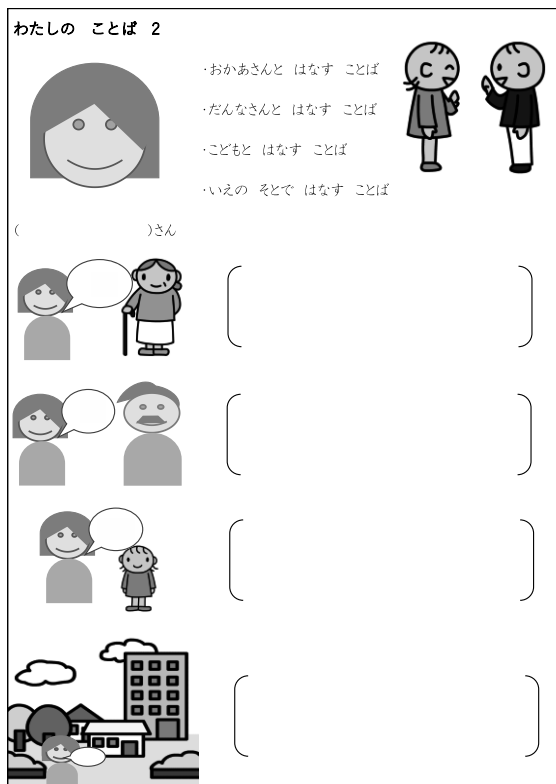
ここで、具体の修正の例を紹介する。フィードバックを受け、また「はじめてのにはほんご」講座での経験を取り入れて、よりわかりやすく、戸惑いを解消することはもちろんであるが、単なるイラストシートでなく、コミュニケーションシートにするため、以下の4点に留意した。

- (1) 双方向のやりとりができるようにする。
- (2) 話したいこと／話せることに注目し、話題を自由に展開できるようにする。
- (3) 自由にコミュニケーションできるように表現や文型を極力削除する。
- (4) 記入用の空欄を省き、余白を残す。(必要だと感じた場合はそこに書き込む。)

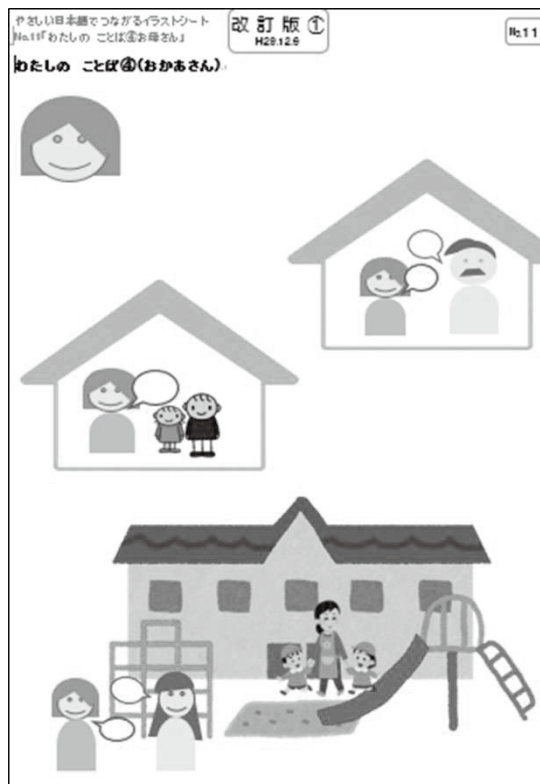
具体的にどのように手を入れたかの例として、縮小してもわかりやすいシートを次のページに掲げておく。左側が試行用に配布した改訂前のシートである。

これは日本人との間の子どもを育てる母親を対象としたシートである。母子間でどんな言語を使うかは子どもの認知基盤を育てる上で大きな影響を与え、母語の確立が先々の学習能力にもつながることが明らかになっている<sup>6</sup>。その視点から、本シートでは、母親が誰を相手にどんな言語で話しているかを話題にすることを狙った。学習者と言語に関する話題は、これ以外にも3シート用意しているが、いずれに対しても細かすぎるとの批判が少なくなかった。しかし、同時に「言語使用の実態がわかった」「シートがあるから尋ねることができた」、「どこで誰に何語を使うかと、使い分けの話題で盛り上がった」という声もあり、シートの使い手により評価が分かれた分野である。改訂前のシートでは、上から順に、①母親自身が自分の親と何語で話すか、②夫と何語で話すか、③子どもと何語で話すか、④家の外では何語か、を表したつもりで、説明に代わる日本語も添えたのだが、意図通りの理解に至るのは容易ではなかったようだ。加えて〔 〕の空欄を一体何に使えばいいのかということで、戸惑いが倍増された。

〔改訂前〕



〔改訂後〕



そこで、大幅に手を入れたのが、右側の改訂後のものである。一見して改訂前と大きく印象が異なるのではないだろうか。まず、家庭内の言語を尋ねていることがわかるように人々を家形の中に置き、外で何語を話すかについては、ママ友と話す場面に限定し、より具体性の強い絵柄に置き換えた。この背景ではママ友に限られるが、ママ友と何語かを話しながら、背景として置き換えられるような別のイラスト、たとえば、役所のカウンターや、病院などの風景を見せれば、流れの中で、役所ではどうか、病院ではどうか、などと問うことも可能だと考えた上での修正である。さらに戸惑いのもととなる空欄をなくし、説明の日本語も混乱のもとということで削除した。これらの削除で、シートのねらいが調査ではなく、コミュニケーションにあるということがわかりやすくなったと考える。

こうした修正をほぼすべてのシートに施していった。戸惑いを生み出しがちだった記入用空欄や、常に賛否が付きまとうモデル会話などは、明らかに文字があったほうが良いと判断された一部を除き、原則削除することにした。(文字を残したものについては、別途、文字なし版も用意した。)

12月14日には、協力ボランティアの方々や日本語教育・外国籍県民支援に造詣の深い有識者5名とともに、修正方針と修正後の改訂シート、ならびに新作シートを披露して意見交換を行う公開検討会を実施した。改訂シートについては、これまでの積み重ねの上の有識者の助言をいただくことができた。一方、新作シートには、従来の教室の会話の範疇からはやや外れた、教室外での用途を意識したものを加えていた。新作シートについては有識者も交えた小グループでの忌憚のない話し合いを行った。ここでもまた率直な反応や、有益なご教示を得ることができたが、これらについては現時点でまだ記録の整理を終えていないため、報告は別の機会に譲る。

### 3. 「やさしい日本語」を併用することでの可能性と専門職への聞き取り

さて、昨今、外国人(日本語非母語話者)<sup>7</sup>とのコミュニケーションの方法として、「やさしい日本語」<sup>8</sup>の利用が注目されている。しかし、言葉による情報はリニア的な一方向配列から逃れられず、それが音声の場合は記憶に残りにくい。いくら「やさしい日本語」を使っても、音声言語だけで重要な情報を伝達するのは、一定の日本語力を持つ外国人を相手にした場合でさえ容易ではない。そのようなときの補助ツールとしてイラストの活用を想定し、助成を申請し、採択された。このことで、コミュニケーションシート作成において否応なく「教室の外」や「汎用性」を意識させられることになった。

もちろん日本語学習者、とりわけ入門期学習者にはさまざまな配慮が必要で、それゆえに入門期用の教材が求められるという現実もよく理解できるし、教室内での使用効果も重要である。しかし、教室内での正確な習得に励むかわら、学習者が生きる現実空間において、その時点で彼らが得たわずかな日本語を使って用を足せるという体験を、コミュニケーションシートによって支えることができれば、彼らの日本語使用に自信を与え、日本語学習に対する前向きな姿勢を維持することにもつながるはずだ。その体験は教室での学習継続の意欲を支えるに違いない。そのような思いから、入門期学習者用教材開発は教室の外に一步を踏み出すこととなった。

日本語教室も多様かつ多数あるが、それは教室の外の多様さとは比較にならない。わたしたちの試みもまず、誰のどのような場面であれば、単なる指さし会話ではない、お互いのやり取りを助ける形のコミュニケーションシートが活用され得るのか、の検討から始まった。その結果、地域生活の中で、時に外国人への対応が求められ、かつ相互のやり取りを伴うような専門的な業務を対象にして、聞き取り調査を行うことにした。

29年度の11月末現在までに聞き取りを終えたのは、子育て拠点保育者、外国人被災者対応経験者、自治体福祉関係職員、自治体窓口職員、自治体保健師、自治体栄養士、国際交流協会窓口職員、児童委員、民生委員、日本語教室外国人リーダーの計15名であるが、このほかにも自治会役員等まだ数名の聞き取りを予定している。また別途業務に関連しても専門性の高い職務の方から多くのヒントをいただいている。文献等から理解する業務内容が日々どのように実践されているか、実際に外国人対応を求められる場面は、具体的にはどのような状況であるか、など、直接お話を伺うことでしか知ることができないため、この聞き取り調査は大変貴重なものとなっている。

現在まだ継続中だが、未整理のまま、一部を紹介すると、「日本人には言葉一つで理解されることでも、外国人には伝えきれない事柄が多い」、「(正確な日時の伝達のような)基本的な事柄の確認に労力を費やす」、「(制度的知識の不足も伴うせいか)信頼構築ができず、継続的な支援・指導が難しい」、「言われて来ているけれど、何で来るのかかわかっていない」など、わたしたちの取り組みがある程度貢献できそうな場面も見えている反面、「やさしい日本語」とイラストだけで「(何もかもしようと)欲張りすぎないように」、「(この現場は)多言語化のほうが向いている」などと限界も指摘されている。また、職務そのものとは無関係ながら、コミュニケーションシートがあつたら、お母さん同士のやりとりが進むのではないか、という提案も複数の方からいただいている。万能ではないにせよ、外国人住民が増加傾向にある中で、日本語教室の外でもコミュニケーションシートが生かせる場がありそうな手ごたえを得ている。

#### 4. 今後の予定

12月14日に開催した公開検討会での助言を反映させた形でコミュニケーションシートを仕上げることを最優先に進める。完成後は、順次アカデミアのHPを利用してウェブ公開をする予定である。入門期学習者であれば、コミュニケーションシートの必要性は高く、彼らに意図が伝わるシートに仕上げることで、言語的なやり取りが容易になり、「ビギナー教材」としての用はほぼ果たせると考えている。取り立てて教授項目などと構えなくても、入門期に必要な学びの素地は自ずと用意されると考えている。さらに今回のフィードバックでも報告があったが、入門期はとうに過ぎた学習者と用いるのであれば、入門期の学習者とは異なり、話の内容を深め、対話を紡ぐきっかけにできるだろう。

日本語教室での日本語習得の完成を待って、おもむろに教室外の日本人との関わりを開始するという道だけでなく、入門期からコミュニケーションシートの助けを借りながら、教室だけでなく、さまざまな場面でその時に持ち合わせているわずかな日本語をつなぎながら、直接日本人と意思疎通を図り、それを重ねて信頼を取り結び、互いに尊重しあえる友人や知り合いを持って、身近なものとして日本社会に関わっていく道があるのではないか。これは日本語教室に背を向けるのではなく、前節で述べたように、むしろ日本語教室での学習促進、学習継続につながる方法である。コミュニケーションシートの教室内外での活用が社会の一員としての自然な日本語習得に役立つのではないか。

そもそも日本で生活するだけなら、日本語能力は必ずしも必要ではない。来日20年以上を経ているにも関わらず、日本語がわからないという人々が少なくないということが、その証しとなろう。それならば、なぜ日本語が必要なのか？それは、日本という国のどこかで、その人らしく能力を生かして働き、家族を持ち、地域の友人と交わり、人生のステージに応じて地域の資源を活用し、自分もまたその地域の暮らしをよくするために地域づくりに参画する、という具合に、同じ地域住民として「ともに生きる」ためである。人間らしい豊かな暮らしを獲得するために、この国では日本語が求められるのだ。日本語の獲得は当人の利益でもあるが、同じ地域に暮らす日本人の利益にもなる。相互にとって、暮らしやすい地域を作り出すために、「やさしい日本語」とコミュニケーションシートを使って、やり取りを重ねていくことが、日本人と外国人の双方に求められる。こうした経験を積み重ね、外国で生まれ育った人も、日本生まれ日本育ちの日本人も、ともに地域社会を考え、ともに次の世代に思いを馳せられるようになったときに、ようやく多文化共生社会の入口が見えてくるのではないか。

国際言語文化アカデミアの設置目的は多文化共生社会の実現への寄与、使命の一つは外国籍県民が暮らしやすい環境づくりである。そこに至る道は遠いが、今回手掛けたコミュニケーションシート開発が、当所の事業目的に合致することを確認し、これまでの日本語教室のボランティアの皆さんのご協力に対して改めて感謝申し上げて、外国人支援事業担当部会からの研究報告としたい。

- 
- <sup>1</sup> 坂内泰子、小島佳子、村上まさみ、嶽肩志江の4名が所属する。
  - <sup>2</sup> これまで、わたしたちは対象とする学習者を、「ゼロ・ビギナー」、「日本語既習歴のない学習者」、「ビギナー」、「入門期学習者」などと不統一な呼び方をしていた。日本で暮らす生活者は、文字通り来たばかりで日本語学習のゼロ・ビギナーと呼べる例もあるが、断片的であれ何かしらの単語や表現を知っていることも多い。学校や地域教室での学習歴がなくても、闊達に日本語で会話をする人がいる反面、識字力が低かったり、外国語学習が初めてだったり、という人もいるといった具合で、極めて多様である。そこで、改めて、本プロジェクトの成果物の主な利用者となる日本語非母語話者は、どのような人なのかを検討し、「日本語による意思疎通が困難な人々」であることを確認し、教室等で日本語を学ぶ際には「入門期学習者」と呼称を統一する。
  - <sup>3</sup> 国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会「ゼロ・ビギナーに対する日本語ボランティアの意識調査」、『国際言語文化アカデミア紀要』第5号, 2016 p.94
  - <sup>4</sup> 国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会「ゼロ・ビギナーに対する日本語ボランティアの意識調査」、『国際言語文化アカデミア紀要』第5号, 2016 p.95
  - <sup>5</sup> 4に同じ
  - <sup>6</sup> ジム・カミンズ, 中島和子『言語マイノリティを支える教育』 pp.61-70, 慶應義塾大学出版会, 2011  
本稿ではシートの絵柄との関係で「母親」としたが、実際は乳幼児の子育てを主に担当する者が自らの母語(自由自在に使える言語)を用いて養育することが意味を持つのであり、「母親」だけに可能だとか、「母親」だけが担うべきだという意図はない。ただし絵柄のジェンダーフリー化はこのシートに限らずイラストとしての課題の一つである。
  - <sup>7</sup> 以下、便宜上、国籍に関わらず日本語非母語話者であるという意味合いで「外国人」を用いる。
  - <sup>8</sup> 坂内泰子「やさしい日本語の普及をめぐる」、『国際言語文化アカデミア紀要』第2号, 2013  
庵 功雄『やさしい日本語 —多文化共生社会へ』, 岩波書店, 2016